魔法少女リリカルなのはvivid 高町家の男子

新宮司 煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはｖｉｖｉｄ　高町家の男子

【Ｎコード】

Ｎ７９４４Ｘ

【作者名】

新宮司　煉

【あらすじ】

これは高町なのはの兄である高町恭也に保護された子供の物語。

様々な出会いを得て少年は何を思うのか？

第一話　プロローグ

「煉、起きろ！　煉！」
「うにゅ～」
「うにゅ～、じゃない起きろーーーー！！」
「痛っ～」
「痛いじゃない……大事な話があるんだ…着替えてしたに来い！」
「うん」

俺の名前は高町　煉、明後日から小４になる１０歳だ…今、俺に拳骨したのはお父さんの高町　恭也だ。
そして

『へい、今日もイカした起こされ方だな、相棒』
「煩いぞ、ダンテ」
『おいおい、八つ当たりか？』

この喋っているバレッタはダンテ…お父さんの話だとデバイスと言う物らしい。
まあ、刀に変形するからタダのバレッタとは思って無かったけど……

俺はお父さんに言われて着替えて下に降りるとサイドポニーの女の人がいた。
誰？

「ふぇぇぇぇ、お兄ちゃんの言う通りフェイトちゃんソックリだ～」
「お父さん……この人は誰？」
「会うのは初めてだったな……この人は高町なのは…俺の妹だ…感

覚としては、煉の叔母さんになる」
「はのは叔母さん？」
「はぅ」

なんだこの人？
いきなり落ち込んだ？

「あのね、煉君…叔母さんはやめて欲しいな…出来ればお姉ちゃんで」
「はあ、それでお父さん……大事な話って何？　なのは姉に関係あるの？」
「ああ、ちょっとダンテを展開してくれ」
「うん」
「ふぇぇぇぇ！？」

驚くなのは姉、まあ、珍しいからね～。

『驚きました……デバイスですね…マスター』

なのは姉の首の赤い玉が喋る。
あれってダンテと同じ？

『驚かせて申し訳ありません、私はマスターのデバイスでレイジングハートです』
「うん、宜しくお願いします、ダンテとは違うや」
『へい、相棒……俺とブレイクハートが同じな訳がね～だろ？』

ダンテの奴……どうして喧嘩を吹っ掛けるかな～。

『私はレイジングハートです』

『お前なんかブレイクハートで十分だろ？』
「ダンテ！」
『やれやれ、相棒……そう怒るなよ』
「レイジングハートさんも御免なさい……うちのダンテは出会い頭に喧嘩を売る趣味があるみたいで……」
『いえ、お気になさらず』

いい人だぁ～　デバイスだけど…

「それで、話の続き何だが、お前は今日から、なのはと一緒にミッドチルダに行ってあっちの学校に行ってもらう」
「はい？」
「デバイスはあっちの世界の技術なの……だからね…あっちの学校で学ばせた方がいいだろうって、お兄ちゃんが」
「はあ」
「それにね…うちには煉君と同い年の娘がいるし……」

娘？
この人……何歳なんだ？
あれか高町家の女性は歳を取らない呪いでもかかってるのか？

『ヒュ～、楽しめそうだし構わねえよ』
「えっと煉君に聞いてるんだけど？」
「ダンテが良ければいいですよ？」
「え？」
「だってダンテが乗り気じゃないのに行ったって展開してくれませんから」
『よく、分かってるな相棒！』
「と言う訳でお願いします、なのは姉」

「あっ、う、うん」

その後、なのは姉とミッドチルダに行ったんだけど…行く先々でフェイトって人と間違えられた……なのは姉の娘のヴィヴィオにさえも……そんな似てるのかな？

キャラ紹介

名前：高町　煉

年齢：１０歳

瞳の色：金と銀の虹彩異色

髪の色：漆黒

性別：男

容姿：黒髪のフェイト（小）

性格：マイペース

魔力値：子供時：Ａ＋　　大人モード時：Ｓ

好きなもの／事：特になし

嫌いなもの／事：煩い奴

一人称：俺

他人称：同い年は呼び捨て…歳上はさん付け

魔力光：紫

レアスキル

覇王流　【カイザー・アーツ】
ベルカ地方のシュトゥラの覇王イングヴァルトの固有格闘技。
ダンテが教えたもの。
何故ダンテが知ってるかは不明。
現在、煉は４つしか使えない。

超古代式魔法【ハイエンシェント・マジック】
古代ベルカ時代に存在したという伝説クラスの超古代魔法。

烈火龍神刀流【れっかりゅうじんとうりゅう】
御神流を参考にし煉が作った気と魔力を使ったオリジナルの剣術。
名前は強そうだからで決定。
御神流と違い刀一振りで使用する。

人物紹介
本作の主人公。
なのはの兄の高町恭也が保護した子供。
一応、恭也が保護者なので、なのはやヴィヴィオとは親戚になる。
御神流を収めておりオリジナルの流派、烈火龍神刀流を使う。
魔法も使える。
恭也がデバイスに気付きなのはに預けられる。
本人は意図していないが時々キツイ一言を言う時がある。
因み煉の中では士郎がおじいちゃん、恭也はお父さん、なのはは叔母さんらしい。
大人モードは本人曰く色々ヤバイらしい。
使用デバイス名：魔剣（まけん）・夜魔刀（ヤマト）
愛称：ダンテ

待機時の形態：悪魔のバレッタ

展開時の形態：鞘付きの日本刀

バリアジャケットのデザイン：青いジーンズに黒のTシャツに真紅のロングコート

術式：古代ベルカ式

デバイスの性格：デビルメイクライのダンテ

デバイス紹介

煉専用のデバイス。

よく喋る…煉は煩い奴は基本的に大嫌いだがダンテだけは許されている。

煉が物心つく頃から一緒にいたらしく、親友を通りこし神友（しんゆう）。

因みに本人曰く……　いい女には例外無く声を掛けるらしい。

烈火龍神刀流

神速

（しんそく）

御神流の奥義の歩法。

通常とは桁違いの速度で動くことが出来る。

白夜斬

（ひゃくやざん）

気を乗せた白い斬撃を放つ技。

暫空閃
（ざんくうせん）
魔力強化での刀の横一閃。
追加効果で斬撃が飛ぶ。

疾風怒濤
（しっぷうどとう）
剣圧で疾風を起こし敵の動きを封じ、上空から叩き斬る。

還り咲き
（かえりざき）
相手の攻撃を払い除け、その勢いのまま瞬時に一閃するカウンター技。

散り桜
（ちりざくら）
対象をすれ違い様に一閃する。
一見、切られたように見えないが、　相手が三歩動きだした時にようやく切られたことに気付くという。

奥義

疾風迅雷
（しっぷうじんらい）
高密度な魔力を乗せた斬撃で高い切断・破砕能力を持つ、自身の神速の歩法と合わせて、高い戦闘性能を誇る。

爆烈桜花斬

（ばくれつおうかざん）
爆炎を纏った刀での一閃。

爆烈百花繚乱
（ばくれつひゃっかりょうらん）
周りに魔力の花びらが散り、斬撃と同時に爆ぜる。

雷神・破蕾
（らいじん・はらい）
雷を纏った光速の突き。

風神・花天月地
（ふうじん・かてんげっち）
飛び上がって刀を高速で振り回し、発生した衝撃波で敵を地面に縫いとめ、落下しつつ突き刺して締める。

速神・早咲き
（そくじん・はやざき）
光速の抜刀による中距離型広範囲空間殲滅斬撃。
横に振りぬく動作の関係上前方ほぼ全てをカバーする事が可能。
剣に伸縮可能な魔力を発生させ、それで斬りつける事で近～中距離の任意空間を薙ぎ払う。

火神・千紫万紅
（かじん・せんしばんこう）
高速移動を行い、炎を纏った刀を使って敵を切り刻んだ後、全体重を乗せて一刀両断する。

土神・花朝月夕
（どしん・かちょうげっせき）

刀から発生させた地を這う衝撃波を浴びせる。

金神・金剛牙爪
（こんじん・こんごうがそう）
刀で突き刺し引き抜くと同時に刀から気の爪を飛ばして切り裂く。

水神・華発
（すいじん・かはつ）
分身が連続で斬りつけ突き刺す。
最後に本体による一刀両断。

木神・八重桜
（もくじん・やえざくら）
刀剣を構えて突撃し何度も斬りつけ、自機の姿を一瞬消した後に居合の要領で一刀両断する。

抜刀術・桜花爛漫
（ばっとうじゅつ・おうからんまん）
鞘に納刀した音が鳴ったときには抜放ち終わっている音越えの抜刀術、あまりに速すぎて斬られた対象はその数秒後にやっと斬られたことに気づく。

禁伝・金剛夢双
（きんでん・こんごうむそう）
抜刀術の欠点である抜刀後の隙をカバーした技。
刀の抜刀と同じ軌道で鞘の斬撃を与える。

隠奥伝・楓牙
（いんおくでん・ふうが）
腰を深く落として相手に向かって半身の姿勢をとり、刀は右手のみ

で持ち刀身は地面と水平に保ち、体の後ろに置き先端を敵に向け、左手を前に突き出して刀にやや重なるような構えから一気に間合いをつめ、相手を右片手一本突きで刺し貫く。

裏奥義

玄武
（げんぶ）
相手の攻撃を身体を捻りながら避け、その回転による遠心力を利用した強烈な一撃。

白虎
（びゃっこ）
高速ですり抜けて後に大量の斬撃を加える。

朱雀
（すざく）
相手の上空から強烈な振り下ろしの斬撃を与え下段から振り上げた刀の峰側に手を添え突き上げるように斬撃を見舞う技。

青龍
（せいりゅう）
剣術の基本である九方向の斬撃を神速で発動し同時に放つ乱撃術と突進術の要素も兼ね備えた防御も回避も不可能な技。

最終奥義

瞬剣・桜咲

（しゅんけん・さくらざき）
神速を超えた超神速の抜刀術、相手に先手を取らせてなお打撃を先に与えることが可能な超スピードの技。

憐剣・黒龍
（れんけん・こくりゅう）
刀による８連続攻撃後に一瞬で相手の背後まで移動し１３回もの斬撃が浴びせ打ち上げ下方に叩き落し複数の剣圧を飛ばして相手を前方に吹き飛ばす技。

星光・破壊・星薙の太刀
（スターライト・ブレイカー・ほしなぎのたち）
刀身を魔力と気でエネルギー化し、さらに巨大な斬神刀とし、地表もろとも標的を破壊し薙ぎ払う。

魔法

一輪大華
（ローラ・フロウリラ）
相手の頭の上に一輪の花を咲かせる魔法。
崇宏が悪戯目的で作った魔法。

豪炎
（ごうえん）
巨大な火球　。
溜め無し思考発動。
推定百ｍ規模の爆発を起こす火球の十倍以上の大きさ＝１ｋｍ以上の爆発を起こす。

振動弾
（ダム・ブラス）
小さい赤い光の球を放ち、当たったものに高振動を与えて対象を粉砕する魔法。

地霊咆雷陣
（アーク・ブラス）
街の数区画くらいの広範囲に雷撃を撒き散らす呪文。
威力は痺れてしばらく行動不能になる程度だが、効果範囲が広いため、回避は困難である。

雷撃破
（ディグ・ヴォルト）
突き出した手から電撃を放つ魔法。
フェイトのトライデントスマッシャーに似ているが別物。

防御魔法

暴王結魔弾
（ヴァデスファランク）
手に魔力を宿らせる魔法。
この術を使用すれば魔力が宿るため素手で魔法を払う事が可能。

バインド

地封穿
（デイバインド）
地面から生えた土のツタで相手の動きを封じる魔法。

対地用バインドとして使用する。

冥魔槍
（ヘルブラスト）
冥王フィブリゾの力を借りる魔法。
全ての生き物の活力を奪う黒い槍を放つ魔法。
この術はあらゆる力を打ち消す働きをする為、ゾンビや魔族にも有効。
バインドの代わりに使用する。

詠唱系

奈落の業火
（インケンディウム・ゲヘナエ）
闇の炎で攻撃する呪文。
詠唱は
来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣、闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焔。
我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者。

紅き焔
（フラグランティア・ルビカンス）
中程度の爆発を起こし、対象を焼き払う魔法。
普通の炎と違って水中や真空中でも炎を発する事ができる。
詠唱は
ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の主にして再生の徴よ、我が手に宿りて敵を喰らえ。

氷神の戦槌
（マレウス・アクィローニス）

巨大な氷塊を作り出し、相手に放つ呪文。
氷塊を作り出し、操るというのは低温を扱う魔法としては単純なものであり扱う質量が大きいという点を除いて、さほど高位な魔法ではない。

凍る大地
（クリュスタリザティオー・テルストリス）
前方の地面を直線状に凍結、巨大で鋭い氷柱を発生させ、敵を攻撃する呪文。
地面にいる敵の足を凍結させ身動きを封じることも出来る。
詠唱は
来たれ氷精、大気に満ちよ。
白夜の国の凍土と氷河。

闇の吹雪
（テンペスタース・オブスクランス）
強力な吹雪と暗闇で敵を攻撃する呪文。
詠唱は
来たれ氷精、闇の精。
闇を従え吹けよ常夜の氷雪。

雷の斧
（ディオス・テュコス）
斧の形状をした雷を相手の頭上へ叩き落す呪文。
詠唱が短く発動が俊敏なため連携向きな魔法と言える。
攻撃範囲はさほど広くなく、近距離～中距離向けの魔法。
詠唱は
来れ虚空の雷、薙ぎ払え。

白き雷

（フルグラティオー・アルビカンス）
強力な電撃を放つ呪文。
詠唱は
闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。

雷の暴風
（テンペスタース・フルグリエンス）
強力な稲妻と旋風で敵を攻撃する呪文。
詠唱は
来れ雷精、風の精。
雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。

魔王系

魔竜烈火咆
（ガーヴ・フレア）
魔竜王ガーヴの力を借りる魔法。
術者の手の平から貫通力のある火線が一直線に伸び、相手を攻撃する。
その攻撃力と貫通力の高さから、状況によっては複数の敵を一撃で全滅させることも可能。

獣王牙操弾
（ゼラス・ブリット）
獣王ゼラス・メタリオムの力を借りる魔法。
術者の意のままに操れる光の帯で攻撃する。

獣王牙操連弾
（ゼラス・ファランクス）

獣王ゼラス・メタリオムの力を借りる魔法。
獣王牙操弾の複数対象版。
複数発の光球で攻撃する。
数は一万～十までの調整がきく。

覇王雷撃陣
（ダイナスト・ブラス）
覇王グラウシェラーの力を借りる魔法。
五芒星の頂点に稲妻が着弾し、そこから伸びた雷撃が対象に襲い掛かる。
攻撃範囲が広い。

覇王氷河烈
（ダイナスト・ブレス）
覇王グラウシェラーの力を借りる魔法。
相手を瞬時に凍結させ、氷の霧として崩壊させる。
崩壊させずに凍らせたままにしておくことも可能。

海王槍破撃
（ダルフ・ストラッシュ）
海王ダルフィンの力を借りる魔法。
超高速の衝撃波で相手を粉砕する。

冥王降魔陣
（ラグナ・ブラスト）
冥王フィブリゾの力を借りる魔法。
逆五芒星の頂点に闇の柱を吹き上がりそこから伸びる黒いプラズマで攻撃する。

竜破斬

（ドラグ・スレイブ）
赤眼の魔王の力を借りる魔法。
赤光が伸びて着弾した瞬間に余剰エネルギー目標が爆発しダメージを与える。
生物でない場合はそのまま破壊力が具現する。
人間が使える呪文のなかでもっとも高い攻撃力を持ち、小さな街一つを消し飛ばすほどの威力と広い攻撃範囲を誇る。
竜用に開発され最初から竜破斬（ドラグ・スレイブ）という名前だった。
習得するには人としては最大級の魔力容量を必要とする。

神滅斬
（ラグナ・ブレード）
金色の魔王の力を借りて両手に生み出した闇をデバイスに凝縮する魔法。
結界等を破る事も可能。
魔力消費が激し過ぎてなのはですら使えない。

第二話　セイクリッドハート

わたし高町ヴィヴィオは、ミッドチルダ在住の魔法学院初等科４年生。
公務員のママとふたり暮らしで、けっこう仲良し親子です。
たまにケンカもするけどね。
わたしのママ、高町なのはが、コンソールを打ちながら訊いてきます。

「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」
「そだよー、帰りにちょっと寄り道してくけど」
「今日はママもちょっと早めに帰ってこられるから、ばんごはんは４年生進級のお祝いモードにしよっか？」
「いいねー♪」

なのはママとそんな話をしていると

『へい、今日も美人だな、お二人さん』
「ふぁ～、お早うございまふぅ」
「おようよう、煉君」
「おはよ～、ダンテ」

欠伸をしながら降りて来たのは高町
たかまち
煉
れん
くんとデバイスのダンテ。
煉くんは、なのはママのお兄さんの息子で私の親戚…初めてあった時はフェイトママに凄く似てて驚いちゃった……ダンテは面白いデ

バイス。

「…さて、それじゃ…」
「うん」
「ふぁ～」

「「「いってきまーす！」」」

わたしとなのはママは、いつものようにハイタッチをしてから煉くは大きな欠伸をしてから出発しました。

St．ヒルデ魔法学院に着いたヴィヴィオは、煉と自分の教室を目指す。
と、

「ヴィヴィオ！」

彼女に声がかかった。
ヴィヴィオは振り向く。
そこにいたのは彼女の友人、コロナ・ティミルとリオ・ウェズリーだ。

「コロナ！リオ！」
「クラス分け、もう見た？」
「見た見た！！」

「三人一緒のクラス！！」
「「「いえーい♪」」」
嬉しくて三人でハイタッチする彼女達。
そこへ、
『へい、楽しそうだな、ヴィヴィオ、お友達も綺麗どころか…煉が羨ましいぜ』
ダンテがヴィヴィオに話かけてきた。
「「誰？」」
リオとコロナは煉を見て首を傾げた。
「私の親戚の高町煉くん…因みに今のは煉くんのデバイスの」
『ダンテだ…可愛い子ちゃん達、相棒共々よろしく頼むぜ』
ダンテはコロナとリオに挨拶する。
「あたしはリオ・ウェズリー宜しくね、煉、ダンテ」
「わたしはコロナ・ティミル、よろしくね、煉くん、ダンテ」
「よろしく、あと気持ちはわからなくもないけど、もう少し人目を気にした方が良いよ」
「「「え？」」」
言われて周りを見るヴィヴィオ達。
見ると、何人かの生徒が彼女達を見て笑っていた。
ヴィヴィオ達は顔を赤くする。

「そういえば、煉のクラスは？」
リオに尋ねられ、煉は答えた。
「君らと一緒だよ」
「ほんと！？」
「すごい！」
「四人一緒のクラスだ！！」
再びはしゃぐヴィヴィオ達。
「だから人目を気にしなって」
「そういえばさ、あいつも一緒なんだよ」
「あいつ？」
「「もしかして…」」
煉はあいつが誰だか分からず首を傾げた。
ヴィヴィオとコロナはすぐに察しがついたようだが……。
「ヴィヴィオーっ！！」
黒髪をポニーテールにした少年が走ってきた。
彼の名はリュウト・ナカジマ。
ヴィヴィオがお世話になっているナカジマ家の長男でヴィヴィオの幼馴染でもある。
「リュウくん！」
リュウトと同じように彼の名を呼ぶヴィヴィオ。

「おお、ヴィヴィオ！クラス分け見た！？　俺達、一緒のクラスだよ！！」
「そうなんだ！すごい！五人一緒のクラス！！」
再びはしゃぐヴィヴィオ。
「だから、人目を気にしろって…行くか」
『おい、相棒』
「俺は騒がしいのが苦手だ」
煉は呆れ気味に言った。

「はー終わった終わった！」
始業式を終え、リオは解放感から背伸びをする。
「それにしても、これからどんな授業があるか、楽しみだね！」
「…煩い」
実は、煉はよく喋る人間が苦手だ……本来マイペースで生きてる彼にとっては寡黙な奴の方が落ち着くらしい……何故かダンテは大丈夫らしいが。
それはそうと、コロナはヴィヴィオに尋ねる。

「寄り道してく？」
「もちろーん！」
ならばとリオは進言した。
「また図書館寄ってこーよ！借りたい本あるし」
「あ、でもその前に、教室で記念写真撮りたいな、お世話になってるみなさんに送りたいんだ、みなさんのおかげで、ヴィヴィオは今日も元気ですよ……って」
「マジマジ！ヴィヴィオ、俺も一緒に写って良いか！？」
「もちろんだよ、リュウくん！」
「じゃあ煉も一緒に…！」
「いや…俺は帰『へい、当然だぜ』ダンテ！？」
『人生は楽しんだもん勝ちだぜ、相棒』
「わかったよ……はぁ」
こうして五人は、教室で記念写真を撮った。

図書館。
「あ、メール返ってきたー」
ヴィヴィオの携帯端末から音が鳴り響く。
リオとコロナは言う。
「そういえば、ヴィヴィオって自分専用のデバイス持ってないんだよね」

「それフツーの端末でしょ？」
「そーなんだよー、うち、ママとレイジングハートがけっこー厳しくって…」

ヴィヴィオは、なのはとそのデバイス、レイジングハートが言っていたことを言う。

〔基礎を勉強し終えるまでは自分専用のデバイスとかいりません〕
〔それまでは私が代役を〕

「だって」
「そーかー」

コロナは苦笑した。

「リオはいーなー、自分用のインテリ型で」
「あははー」
『すみません』

リオも苦笑し、彼女のデバイス、ソルフェージュは謝る。

「リュウくんはアームドだっけ、それもいーなー…」

ヴィヴィオはリュウトを羨ましがる。

「…デバイスねぇ…」

リュウトは自分のデバイスを見る。

『何？　私を見つめても何も出ないよ？』

「ああ、気にするな…クレア」
リュウトとクレアの間に沈黙が流れるが……
『んだよ、会話が続かねえな、お前等』
「ダンテ、煩いぞ」
ダンテが茶々を入れる。
「あはははは、ところでダンテは何型なの、煉くん？」
「知らん」
「えっ、知らない？」
『ああ、相棒は一昨日初めてミッドに来たからな……デバイスの種類からしてまだベイビーたからな……因みに俺はアームドだせ』
「相変わらず……よく喋るな」
『根暗よりマシだろ？』
「「……」」
二人はそのまま黙ってしまった。
（…重い！）
（空気が…！）
（あー…）
ヴィヴィオ達はなんとか話題を変えようと頭を捻る。
と、ヴィヴィオの端末から音が鳴り響いた。
「あ…丁度ママからのメールだ」
「なにかご用事とか？」
「あーへいきへいき、早めに帰ってくると、ちょっといいことがあ

るかもよ…だって」
「そっか」
「じゃ、借りる本決めちゃお！」
「うん！」

本を探しに入るヴィヴィオ達。
だが、リュウトと煉は黙ったままだった。

「リュウトくん！煉くん！」

コロナの言葉で、二人はようやく我に返る。

「ごめんコロナ…」
「悪い」

（何を考えてたんだろう…）
コロナはそう思った。

帰り。
校門で一人の女性が待っていた。

「あっ、ウェンディ」
「ヴィヴィオ、久しぶりッス」

彼女の名前はウェンディ・ナカジマ…リュウトの姉である。

「リュウ、迎えに、来たッス」
「一体どうしたんだウェンディ？今まで迎えなんてしなかったろ？」
「最近はこの辺りも物騒になってきたから万が一のことが無いようにッス」
「…わかった、じゃあ帰ろうぜ」
「あっ！買い物してからッスよ？」
「あいよ、つーわけだ、ヴィヴィオ、俺はもう帰る」
「うん、また明日ね！」
「ああ、また明日」

リュウトはウェンディとともに帰宅した。

「…じゃあ、わたし達も帰ろっか！」
「ああ」
「そーだね！」
「じゃ、また明日！」

ヴィヴィオ達は別れた。

実は、わたしはその昔、生まれ方関係でいろいろあったりした。
煉くんと同じで、なのはママとも血の繋がった親子ではないし、今は仲良しのみんなとも、ほんの数年前には本当に、本当にいろいろな事があった。
助けてくれたいろんな人たち。

わたしがわたしのまま、高町ヴィヴィオとして生きる事を許してくれた人たちのおかげで、

わたしは今、なんだかすごく幸せだったりします。

「たっだいまーっ！」
「おかえりーヴィヴィオ」
「あれ？フェイトママ！？」
「うん」
「バルディッシュも！」
『お久しぶりです』
「フェイトママ、艦の整備で明日の午後までお休みなんだ、だから、ヴィヴィオのお祝いしようかなって」
「そっか…ありがと、フェイトママ」
「お茶いれるから、着替えてくるといいよって……私！？」
「俺？」

フェイトママと煉くんはお互い向き合って同じ動きをしてた。

「「似てる……」」
「ぷっ」
「フェイトママも煉くんも何をしてるの、可笑しい～」
「いや」
「だって」
「「ソックリだから」」
『お二人さん、言ってる事が一緒だぜ』

フェイトママは、なのはママの大親友。
9歳の頃からだって。
わたしがなのはママと親子になる時後見人になってくれて、その時なんだかわたしはフェイトママの事もママって思っちゃったらしくて…覚えてないよ！
ちっちゃい頃の事だもん。

以来ずっと、わたしには二人のママがいる状態。

まぁ、ちょっと変わってるけど、ふたりともわたしの大切なママです。

「ごちそうさまー！」

ヴィヴィオは夕食を終えた。

「さて！今夜も魔法の練習しとこーっと」
「あーヴィヴィオ、ちょっと待ってー」

なのはがヴィヴィオを呼び止める。

「ヴィヴィオももう4年生だよね」
「そーですが」
「魔法の基礎も大分できてきた、だから、そろそろ自分のデバイスを持ってもいいんじゃないかなって」
「ほ…ほんとっっ！？」

思わず自分の耳を疑うヴィヴィオ。
そんな彼女に、フェイトは箱を渡す。

「じつは今日、私がマリーさんから受け取ってきました」
「あけてみてー」
「うん！」

ヴィヴィオは期待を膨らませ、箱を開ける。
中に入っていたのは…

「うさぎ…？」

だった。

「あ、そのうさぎは外装というか、アクセサリーね」
「中の本体は、普通のクリスタルタイプだよ」

交互に説明するなのはとフェイト。
その間にうさぎは浮かび上がり、挨拶するように手を上げた。

「とっ…ととと飛んだよっ！？動いたよっっ！？」

驚いてママ達の後ろに隠れるヴィヴィオ。

「それはおまけ機能だってマリーさんが」
「あ…」

フェイトが説明して、うさぎはヴィヴィオの腕の中に収まる。

「色々とリサーチもしてヴィヴィオのデータにあわせた最新式ではあるんだけど、中身はまだほとんどまっさらの状態なんだ」
「名前もまだないからつけてあげてって」
「えへへ…実は名前も愛称ももう決まってたりして」

再びなのはとフェイトから説明を受けて顔をほころばせるヴィヴィオ。
と、ヴィヴィオはあることが気になった。

「そうだママ！リサーチしてくれたってことはアレできる！？アレ！！」
「もちろんできるよー」
「……？」
なのはは何のことかわかっているようだが、フェイトはわからないらしい。

その後、庭にて。
ヴィヴィオは新しいデバイスの登録を行う。
「マスター認証、高町ヴィヴィオ、術式はベルカ主体の混合ハイブリッド、わたしのデバイスに個体名称を登録、マスコットネームは【クリス】、正式名称【セイクリッド・ハート】」

ヴィヴィオは登録を終えた。
次はいよいよ初起動だ。

「いくよクリス」

ヴィヴィオの呼びかけに応えて、彼女の新たなデバイス、クリスが力強く右手を上げる。
そして、

「セイクリッド・ハート！セーットアーーップ！」

ヴィヴィオはクリスを掴み、起動させた。
眩いばかりの光に包まれるヴィヴィオ。
光が消えた時、
ヴィヴィオの姿はバリアジャケットを纏った大人の女性へと変わっていた。

『おう、やっぱ成長するとイイ女だな、煉、今から落としとけよ』
「黙れ色ボケ、スクラップにすんぞ」

ヴィヴィオの成長ぶりに茶々を入れるダンテと突っ込む煉。

「やったぁー！ママありがとー！」
「あー上手くいったねー」

無事に初起動が成功し、喜ぶヴィヴィオとなのは。
しかし、フェイトだけが喜んでおらず、そのままへたり込んでしまった。

「フェイトママ？」
「……あ」

なのはは重要なことを思い出す。だが、もう遅かった。

「なのは…ヴィヴィオが…ヴィヴィオがぁぁー！！」
『おわっ、いきなり何だ？』
「情緒不安定なのか…あの人は？」
「いや、あの、落ち着いてフェイトちゃん、これはね？」
「ちょ…！なのはママ！なんでフェイトママに説明してないのー！」
「いやその…ついうっかり」
「うっかりってー！」

こうして初起動は、大騒動に終わった。

「連続傷害事件？」

リュウトはウェンディから、今日、迎えに来た理由を聞いていた。

「そうッス被害届が出てないから、まだ事件扱いじゃないってチンク姉が…」

ウェンディの話では、最近格闘系の実力者が何人も街頭試合を挑まれ、完膚なきまでに叩きのめされているらしい。
ウェンディはリュウトが襲われることを心配して迎えに来たのだ。

「で、どこのどいつなんだ？」

「それがッスね…覇王…イングヴァルトって相手はそう名乗ってるらしいッス」
「覇王イングヴァルトといえば、古代ベルカ、聖王戦争時代にシュトゥラの国を治めていたっていう英傑…何でそんなやつの名前を…」
「チンク姉もわからないって言ってたッス」

キャラ紹介２

名前：リュウト・ナカジマ

年齢：１０歳

瞳の色：青

髪の色：黒

性別：男

容姿：シグナム

性格：ノリがいい

魔力値：Ａ　　大人モード：Ｓ

好きなもの／事：ヴィヴィオ、友達、家族

嫌いなもの／事：自分の大切な物を傷付ける奴

一人称：俺

他人称：ナカジマ家は姉、歳上はさん付け、年下と同い年は呼び捨て

魔力光：緑

レアスキル

王の財宝【ゲート・オブ・バビロン】
リュウトが作成した特殊な体術の流派、技名が全て伝説の武器の名前である。
因みにまだ、発展途中らしい。

人物紹介
ゲンヤが任務中に拾って来た男の子。
最初は人形の様でナカジマ家の人達や周りの人達のお陰で笑顔を取り戻す。
ただ今、ヴィヴィオに初恋中。
煉とは真逆の性格だが比較的、相性はいい。
何人かは愛称で呼んだりする。
何故かシグナムと瓜二つな為、はやてのお気に入り。

使用デバイス名：クレア

愛称：クレア

待機時の形態：鍵型のペンダント

展開時の形態：手甲と具足

バリアジャケットのデザイン：青いTシャツに黒いズボン

術式：近代ベルカ式

デバイスの性格：寡黙

デバイス紹介

ナカジマ家がお世話になってる技術者のマリーさんがリュウト専用に組んだデバイス、リュウトとは逆で余り喋らない。
リュウトと仲はいいのだが会話が続かないのが悩み。

技

騎兵の手綱
（ベルレフォーン）
弓を引くような構えを取り、手に魔力を集めて貫手を繰り出す。
命中の瞬間にエネルギーを爆発させる。

自己封印・暗黒神殿
（ブレーカー・ゴルゴーン）
飛び上がって連続して蹴り、発生した衝撃波で敵を地面に縫いとめ、敵を再度踏み台にし飛び上がり、落下しつつ膝蹴りで締める。

他者封印・鮮血神殿
（ブラッドフォート・アンドロメダ）
天を指で指し力を誇示した後、飛び降りて2連撃で打ち上げる。その相手を飛び上がって追い、地面に叩き付けて動きを止め、敵が山脈を貫通するほどの一撃を繰り出して締める。

転輪する勝利の剣
（エクスカリバー・ガラティーン）
拳に炎を纏い連打を繰り出し、さらに至近距離で爆発を叩きつける。

神威の車輪
（ゴルディアス・ホイール）
雷気を拳に雷を纏う。
その後、左右の連続パンチに続いて高速でパンチを繰り出した後、

拳が分裂して見えるほどのラッシュ、回し蹴り、さらにアッパーで打ち上げ最後は落ちて来た敵に渾身の蹴りを叩き込む。

破魔の紅薔薇
（ゲイ・ジャルグ）
特殊な魔力を帯びた正拳突き。
触れると魔力を打ち消す効果がある。

刺し穿つ死刺の槍
（ゲイボルク）
必中必殺の正拳突きを放つ技。
この技の魔力を最大解放しな放つ事により拳撃を飛ばす「突き穿つ死翔の槍【ゲイボルク】」にもなる。

串刺城塞
（ガズィクル・ベイ）
滅多打ちにしたあと打ち上げた敵を空中から自分の目の前に叩き落とし、最後に渾身の一打を叩きこんで吹き飛ばす。

螺湮城教本
（プレラーティーズ・スペルブック）
相手に残像が残るほどの拳を浴びせた後、アッパーで打ち上げ魔力で作った龍で飲み込む。

射撃場系

斬り抉る戦神の剣
（フラガラック）
魔力出で来たナイフを作り出す。

二つ名でもある【後より出でて先に断つもの（アンサラー）】の詠唱によって待機状態に入りる。
相手の発動より明らかに遅れて発動しながらも、絶対に相手の攻撃よりも先にヒットする。

砲撃系

祈りの弓
（イー・バウ）
フラガラックを拳で打ち放つ技。
威力は、なのはのエクセリオンバスターに匹敵する。

収束砲撃系

約束された勝利の剣
（エクスカリバー）
魔力を変換し絶大な出力の“光”の拳撃として放つ。

補助防御系

無毀なる湖光
（アロンダイト）
使用者の全パラメーターを1ランク上昇させる技。

破戒すべき全ての符
（ルールブレイカー）
あらゆる魔法によるバインドを無効する。

天の鎖
（エルキドゥ）
鎖型のバインド。

全て遠き理想郷
（アヴァロン）
シールドタイプの防御魔法。

招き蕩う黄金劇場
（アエストゥス・ドムス・アウレア）
バリアタイプの防御魔法。
発動中は黄金に輝く。

第三話　昔はいろいろありました

むかしむかし
花咲く庭でふたりは出会って
だけど訪れたのは
残酷な現実
ふたりはぶつかって
戦って
伝え合って
抱きしめ合って
『親子』になって
ふたりの時間は静かに優しく

「流れていってるんだって思ってたんだけど…」
フェイトは呆れ気味に呟き、
「それがなんでまたこんな事にッ！？」
今まさにこんな事になっているヴィヴィオと、どう説明しようか頭を悩ませているなのはに言った。

現在ヴィヴィオは大人の姿になっている。
しかし、これはフェイトにとって二度目に見た光景だった。
ヴィヴィオは狂気の科学者、ジェイル・スカリエッティが生み出したベルカの王、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトのクローンだ。
聖王のゆりかごという恐るべき兵器の起動キーでもある。
ヴィヴィオはその起動キーとして利用された際、今の大人の姿になったのだ。

「いや、あのねフェイトママ？大人変化自体は別に聖王化とかじゃないんだよ」

心配するフェイトに説明するヴィヴィオ。

「魔法や武術の練習はこっちの姿の方が便利だから、きちんと変身できるように練習もしてたの。なのはママにも見てもらって、もう大丈夫だね、って」
「そうなの！」

なのはも慌てて説明に加わる。

「でも……」

それでもフェイトの心配は収まらない。

「んー…」

ヴィヴィオは考えた後、クリスに命じる。

「クリス、モードリリース！」

クリスは右手を上げて了承し、ヴィヴィオは元に戻った。
「なにより、変身したってヴィヴィオはちゃんとヴィヴィオのまんま！ゆりかごもレリックももうないんだし」
その言葉を聞いてフェイトだけでなく、なのはも表情が曇ったが、
「だから大丈夫、クリスもちゃんとサポートしてくれるって」
「うん……」
フェイトは少し安心した。
「心配してくれてありがとうフェイトママ、でもヴィヴィオは大丈夫です、それにそもそもですね？」
ヴィヴィオは言う。
「ママたちだって、今のヴィヴィオくらいの頃にはかなりやんちゃしてたって聞いてるよ？」
「そ、それは、その…」
「あははー」
痛いところを突かれてしまい、赤面するなのはとフェイト。
人のことは言えない。
「そんなわけで、ヴィヴィオはさっそく魔法の練習に行ってきたいと思います」
「あ、わたしも！」
「いいですか、フェイトママ」

「はい、気をつけて」
フェイトは出かける二人を見送った。

それから数分後、フェイトはヴィヴィオのことについて、現在辺境自然保護隊として活動している彼女の子供達（血は繋がっていない）、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエと連絡をとっていた。

「キャロとエリオは聞いてたりした？」
「大人モードって単語だけはたまに。」
「でも、まさか変身制御の事とまでは」
「やっぱりー？」

予想通りの答えに呆れるフェイト。
それに対して、キャロとエリオは交互に続けた。

「ヴィヴィオ、魔法も戦技も勉強するのが好きですから、できる事はなんでも試してみたいんですよ」
「リュウトもいますし、ヴィヴィオはあれでしっかりしてます、心配ないと思いますよ」
「……うん」

フェイトはようやく納得した。

「ところでフェイトさんの膝の上にいるフェイトさんは誰ですか？」

余程、気になっていたのかキャロが身を乗り出して聞く。

「高町　煉…なのは姉とは叔母と甥にあたる、宜しく、後、フェイトさんに似てるのは偶然だ…フェイトさんも好い加減に離してくれ」
「やだ♪」
「即答…はぁ～」
『俺は相棒のデバイス、ダンテだ宜しく、青少年と青少女』
「あはは、僕はエリオ・モンディアル、宜しく、煉、ダンテ」
「私はキャロ・ル・ルシエ、宜しくね、煉、ダンテ」

何故かフェイト一家の会話に入れられてしまった煉。

「そっちはどう？お仕事の調子は」
「今日もホントに平和でしたよ」
「今やってる希少種観測ももうすぐ一段落ですから、来月にはフェイトさんのところに帰れそうです」
「ほんと？私も休暇の日程調整してみるね」
「はい」
「お買い物に行きたいですー♪　煉も一緒に行こうよ♪」
「は？」
『イイじゃねえか、可愛い子ちゃんからの誘いは断るもんじゃないぜ』

ヴィヴィオについての話を終えた四人と一機は、次に再び会える時に向けての話を始める…。

ヴィヴィオは大人モードに変身して、なのはと夜道を歩いていた。
二人の側には、クリスとレイジングハートが浮いている。

「やっぱりいいなー大人モード♪ねークリス♪」
右手を上げて同意するクリス。
「だよね～♪」
楽しむヴィヴィオに、なのはは言う。
「ね、ヴィヴィオ？」
「はい？」
「大人モードはヴィヴィオの魔法で、自分の魔法をどう使うかは、自分で決めることなんだけど、いくつか約束してほしいんだ」
「…うん」
「大人モードは、魔法と武術の練習や実践のためにだけ使うこと、いたずらや遊びで変身したりは、絶対しないこと、ママと約束」
そこまで言ったなのはは、指切りの指を出す。
「うん、遊びで使ったりは絶対しません」
ヴィヴィオはなのはの指に自分の指を絡ませ、指切りする。
「天に誓って？」
「天と星に誓って」
二人は約束した。
「それに、魔法で身長がママよりおっきくなったって、心まで大人になるわけじゃないもん」
言ってヴィヴィオが見せた笑顔は、子供そのものだ。

「ヴィヴィオはまだまだ子供だから、ちゃんと順番追って大人になってくよ、普通に成長してこの姿になった時、恥ずかしくないように、自分の生まれとなのはママの娘だって事に、えへんと胸を張れるように…」

ヴィヴィオは胸を張ってみせた。

そんな彼女を、

「…ちょっと生意気！」

「にゃっ！」

なのはは力いっぱい抱きしめた。

「にゃー！せっかくイイ事言ったのにー！」

「あはは♪」

戯れ合う親子を、クリスはレイジングハートとともに見つめていた。

やがて、市民公園の公共魔法練習場にたどり着いた二人。

「じゃ、基本の身体強化系からね、それから放出制御！」

ヴィヴィオがクリスに命じ、クリスが右手を上げて返答する。

「クリスの慣らしもあるんだから、いきなり全開にはしないんだ。」

「だーいじょーぶ！」

ヴィヴィオは構えを取った。

（帰ったみんなにメールを送って…）

思いながら、足元に魔法陣を展開。

（ノーヴェにも、明日から一杯、一緒に練習しようねって伝えて…）

やることが山積みのヴィヴィオは、ふと、思い出す。

（ああそれから、またあの子に会いに行こう）

思い出したのは、一人の少女。

（わたしの故郷に咲いてた花と、綺麗な世界の写真を持って…）

思い出して、ヴィヴィオは腕を振った。

ナカジマ家。

「へー、ついにヴィヴィオもデバイス持ちっスか」

「よかったね、今度見せてもらおう」

ウェンディ・ナカジマとディエチ・ナカジマは言った。

「そっか……クレア、ヴィヴィオにおめでとうって、メールを頼む」

『うん』

リュウトはクレアでヴィヴィオにメールを送る。
一家の当主、ゲンヤ・ナカジマが尋ねる。

「高町嬢ちゃんの一人娘か、今いくつだっけ？」
「リュウと同じ１０歳ですね、４年生ですよ、クラスも確か一緒ですよ」

答えたのはギンガ・ナカジマ。

「もうそんなか、前に見た時は幼稚園児くらいだったと思ったがなぁ…」
「それ、六課時代じゃない」
「もうだいぶ前っスよ」

すかさずツッコミを入れるディエチとウェンディ。
チンク・ナカジマはノーヴェ・ナカジマに尋ねた。

「ヴィヴィオの武術師範としては、やはり嬉しいか」
「え」

突然のことに詰まるノーヴェは、

「別に師匠とかじゃないよ、一緒に練習してるだけ、まだまだ修行中同士、練習ペースが合うからさ…」

と、赤くなって返す。
そこでノーヴェは思い出した。

「あ、おとーさん、ギンガ、あたし明日、教会の方に行ってくるか

ら」
「そう」
「いつものお見舞いか？」
「ん、そんなとこ」
「じゃ、あたしも行くッス！セイン姉と双子をからかいに！」
「姉も行きたいな、久し振りに」
続々と同行を希望するウェンディとチンク。
「えー！？」
「だめよーあんまり大勢で押しかけちゃ」
ノーヴェは反応し、ギンガは笑いながら言った。

聖王教会本部にて。
シスターセインはとある部屋の中にいた。
「今日もお日様一杯のいい天気だよ」
花瓶の水を取り換え、カーテンを開ける。
「そうそう、午後にはヴィヴィオとノーヴェ達が会いに来てくれるってさ」
セインは話しかける。
「楽しみだね、イクス」
この部屋のベッドの上で眠り続ける、一人の少女へと…。

第四話　ストライクアーツ

聖王教会本部。
ここに来客があった。

「いよーっスオットー、ディード♪」
「久し振り」

現在聖王教会にて職務に勤しむ執事オットーとシスターディードに挨拶するウェンディとディエチ。

「ウェンディ姉様、ディエチ姉様」
「ふたりともごぶさた」

ちょうどお茶の準備をしていたオットーとディエチは、二人を椅子に座らせ、ディードが尋ねる。

「他の皆さんは？」
「チンク姉とリュウは騎士カリムとシスターシャッハんとこ、なんかお話だって」
「ヴィヴィオとノーヴェはイクスのお見舞い」
「イクス、元気っスか？」

ウェンディに訊かれ、

「健康状態には異常無し、静かにお休みだよ」

お茶をカップに淹れながら答えるオットー。

「陛下やスバルさんもよくお見舞いに来て下さいますし、きっと楽しい夢を見ておいでなのかと」

ディードも茶菓子を用意しながら言う。

その頃、ヴィヴィオとノーヴェは、とある一室にいる少女、イクスの元へお見舞いに来ていた。

イクスヴェリア。

ガレア王国の君主であり、冥王と呼ばれた少女。

彼女はマリアージュという生体兵器を無限に生み出す力があり、その力ゆえ、ずっと苦悩してきたのだが、とある事件の最中、スバルに救出され、彼女にとって望む世界を見た後、機能不全によって眠りについた。

その機能不全は現代の技術による修理ができないらしく、現在聖王教会の保護を受けた彼女は、いつ覚めるともわからない眠りについている。

ヴィヴィオはイクスが眠りにつく前に彼女と対話しており、それから友人になった。

以来、スバル達とともに、よくお見舞いに来ている。

「ごきげんようイクス、お加減良さそうだね？」

ノーヴェとセインが見守る前で、イクスの手を握って話しかけるヴィヴィオ。

イクスは依然として目覚めないが、その寝顔は、安らかなものだった…。

チンクとリュウトはカリム・グラシアの執務室で、騎士カリム、シスターシャッハに話をしていた。

「お話っていうのは……例の傷害事件の事よね？」

「ええ、我ながら要らぬ心配かとは思ったのですが…」

言いながらコンソールを操作して、写真を出すチンク。

写っていたのはイングヴァルト。

「件の格闘戦技の実力者を狙う襲撃犯、彼女が自称している『覇王』イングヴァルトと言えば…」

「ベルカ戦乱期…諸王時代の王の名ですね」

「はい、時代は異なりますがこちらで保護されているイクスヴェリア陛下や、ヴィヴィオのオリジナルである『最後のゆりかごの聖王』オリヴィエ聖王女殿下とも無縁ではありません」

そこまで言われて、カリムはチンクの言いたいことに気付いた。

「ヴィヴィオやイクスに危険が及ぶ可能性が？」

「無くはないかと、聖王家のオリヴィエ聖王女、シュトゥラの覇王イングヴァルト、ガレアの冥王イクスヴェリア、いずれも優れた『王』達でしたから…ああもちろん、かつての王達と今の二人は、別人ではあるのですが…」

慌てて両手を振るチンク。

が、

「ええ」

「それを理解しない者もいるという事ですよね」

カリムとシャッハは全てわかっていた。

シャッハは言う。

「とはいえ、『覇王イングヴァルト』は物語にも現れる英傑です、単なる喧嘩好きが、気分で名乗っているだけという可能性も大きいですよ」

「ですね」

「でも犯人が捕まるまで、イクスの警戒は強化するわ、ヴィヴィオについては……」

「それはこちらで、私と妹達が、それとなく」

「ああ、俺がヴィヴィオを守るよ」

「みんな、ごきげんよう～♪」

お見舞いを終えてきたヴィヴィオは、オットー達に挨拶する。

「ああ、これは陛下」

「陛下、イクス様のお見舞いはもう？」

「うんディード、いっぱい話したよ」

「あたしらはもう戻るけどお前らは？」

ウェンディとディエチに訊くノーヴェ。

「あーあたしも」
「私はもう少し」

ウェンディが同行し、ディエチは残ることになった。

「待ってくれ、俺も行くから～」

リュウトが走りながら合流する。

「陛下、よろしければこれを、自信作のビスケットです」
「わ♪ありがとオットー♪」
「んじゃ、あたしは三人を送ってくるなー」

セインに送られ、ヴィヴィオ、ノーヴェ、ウェンディは、オットー、ディードと別れた。

ノーヴェはヴィヴィオに尋ねた。

「しかしいいのかヴィヴィオ、双子からの陛下呼ばわりは」
「え？」
「前は、『もーっ、陛下って言うの禁止ーっ』……とか言ってたろ」
「あー…まあ、もう慣れちゃったし、あれもふたりなりの敬意と好意の表現だと思うし」
「あいつら、なんかズレてっからなぁ」

ヴィヴィオとノーヴェがそんなやり取りをしている間、セインはウェンディに言う。
「この後はいつもの『アレ』か、ん？ウェンディもやるんだっけ？」
「ま、ふたりにお付き合いっス」

ミッドチルダ中央市街地。
リオとコロナと煉は、待ち合わせをしていた。
「リオ！コロナ！煉くん！おまたせー！」
『そんな事ないぜ…俺らも今、来たとこだ……何処ぞの引篭りが中々動かなくてな』
「あははは、煉くんとリオノーヴェと初対面だよね？」
「うん、はじめまして！去年の学期末にヴィヴィオさんと友達になりました、リオ・ウェズリーです！」
元気よく挨拶するリオ。

「高町　煉だ…宜しく」
『相変わらず……挨拶のレパートリーの少ない奴だ…俺はデバイスのダンテだ…宜しく」
「ああ、ノーヴェ・ナカジマと、」
「その妹のウェンディっス♪」

二人も挨拶する。
さらに、コロナが紹介した。

「ウェンディさんはヴィヴィオのお友達で、ノーヴェさんは私達の先生！」
「よ、お師匠様！」
茶化すウェンディ。
「コロナ、先生じゃないっつーの！」
ノーヴェは否定するが、
「先生だよねー？」
「教えてもらってるもん」
「先生って伺ってます！」
三人に言われ、
「ホラ」
「…うっせ」
照れるしかなかった。
『照れた顔もキュートだな』
「お前、馬鹿だろ？」
ノーヴェをキュートと言うダンテに対して煉は突っ込んだ。
中央第四区公民館。

ヴィヴィオ達はストライクアーツという格闘技の練習をするため、練習着に着替えていた。

「でもやっぱ意外～！ヴィヴィオもコロナも文系のイメージだったんだけどなぁ、人は見かけによらないよね」

言ったのはリオ。

「文系だけど、こっちも好きなの」

「わたしは全然、エクササイズレベルだしね」

「ほんと～？」

着替えながら談笑するヴィヴィオ、コロナ、リオ。

そこへ、ノーヴェが来た。

「さ、いくぞー」

「「「はーいっ！」」」

元気よく返事をし、早速練習に入る。

ヴィヴィオ達。

「へー！なかなかいっちょまえっスねぇ」

「だろ？」

ストライクアーツはミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技であり、広義では『打撃による徒手格闘技術』総称でもある。

「でもヴィヴィオ、勉強も運動もなんでもできてすごいよねぇー」

ヴィヴィオに拳を放つリオ。
「ぜーんぜん！まだなんにもできないよ」
言いながら受け止めるヴィヴィオ。
「自分が何をしたいのか、何ができるのかもよくわからないし」
そのまま、ヴィヴィオはリオと軽く打ち合う。
「だから今はいろいろやってみてるの」
「そっか」
リオはヴィヴィオの蹴りをかわす。
ヴィヴィオは一度打ち込みをやめ、言った。
「リオとコロナと、リュウくんに煉くんといろんな事、一緒にできたら嬉しいな」
「いいね！一緒にやってこう！」
同意するリオ。
コロナも柔らかな笑みを浮かべた。
その時、声援が上がった……ヴィヴィオ達が見ると煉とリュウトがいた。

ヴィヴィオたちが二人に気づくちょっと前。

「本当にやるのか？」

「ああ、行くぜ！」

そう言ってリュウトは高速で後ろに回り込み煉の足もとに水面蹴りを放つ。

「気が進まないな！」

煉はそれを軽々と前に一歩だけ素早く進み避ける…そして目の前から消えた…

「なっ！！」

さすがに目の前で姿を消されたのは初めての体験だったのかリュウトは驚いた…

そして…

「がっ……」

リュウトはその場で倒されていた。

そしてリュウトは先ほど自分がやろうとしていたことをそのまま煉にやり返されていたことに気付いた。

「つぅ……いやらしい真似してくれるじゃねぇか、煉！」

「リュウトは油断しすぎだろ？

てか何で俺が……ああ、面倒だ」
そういって面倒くさがる……煉。
「いや、お前はヴィヴィオの事をどう思ってるのかと思ってさ？」
リュウトは構え直して煉の言葉に答える。
「どうって……ただの親戚だろ？」
「いや、俺が聞きたいのは可愛いとか、そう言うので……」
リュウトは煉に今度は真正面から突っ込む！
「安心しろ、お前と違ってよく分からん！」
「そりゃ、威張る事じゃねえだろ！？」
リュウトは拳を超高速で煉を連打する。
「だろ？」
「俺さ、お前の事が嫌いじゃないぜ？」
「いきなり何の話だよ？」
煉はそれを手刀で、拳で、手のひらで打ち払い・打ち合い・受け止める。
……この二人は話してる事はほのぼのしてるが試合は真剣（マジ）だった。
「だからさ、お前とも仲良くなってお互いを高めて行けたらって思ってる」
「何だ？　ライバル宣言と受け取ってもいいのか？　ふんっ」

煉がリュウトの両手を掴み……強烈な蹴りを腹に放ってきた。
「ぐがっ……」
壁まで突き飛ばされるリュウト。
「良いぜ、その宣言、受けてやるよ」
煉はリュウトの目の前に行きそう言った。

「信じられねえ、うちのリュウとまともに試合してやがる」
「尋常じゃないッス」
ノーヴェとウェンディは煉がリュウトと試合してるのを見て驚いてる。

「すご〜い、煉くん、あのリュウトくんと戦ってる」
「煉、強〜い、ヴィヴィオ、煉は何かやってるの？」
コロナは感激しリオはヴィヴィオに尋ねる。
「なのはママが言うには御神流って言う流派を体得した剣士って言ってたけど」
などとヴィヴィオ達が話していると
「痛え」
「これでも加減したんだがな」

リュウトと煉が帰って来た。

「凄いね、煉くん、強かったんだね」

「本当に凄いな、私にも教えてよ」

『オイオイ、お嬢ちゃん達そいつはチョット違うぜ』

「ダンテの言う通りだ……リュウトは本気を出してない……てか、出されたら今頃はミンチだ」

「「えっ！？」」

煉の言葉に驚くコロナとリオ

「良くわかったな、煉……でもお前も本気じゃねえだろ？」

「俺はあくまで、刀を使った剣術が主体だ…拳なんて余程の事がないと使わないさ」

「良いね～、剣士か……試合ってみたいな」

「そうだな……その時はお前の技の一つも見せて貰うとするか」

「ああ、望むところだ！」

何故か煉とリュウトは男の友情に目覚めた。

「さてヴィヴィオ、あたし等もぼちぼちやっか？」

ノーヴェがヴィヴィオに声をかける。

「うん！さー出番だよクリス！」

右手を上げて応えるクリス。

「セイクリッド・ハート！セット・アップ！」
ヴィヴィオは大人モードになった。
「すみません、ここ使わせてもらいまーす」
「失礼しまーす」
お願いして周囲の人々に場所を空けてもらう二人。
「なんかふたりとも注目されてない？」
「ふたりの組み手凄いからねー、リオもきっと、ちょっとびっくりするよ」
「いくよ、ノーヴェ」
「おうよ！」
静まりかえる練習場。
先に仕掛けたのはノーヴェだった。
繰り出されるハイキックとアッパー。
ヴィヴィオはこれをかわして右ストレート。
「ふたりとも、やるもんっスなぁ」
「はい！」
ヴィヴィオとノーヴェ、互いの蹴りがぶつかり合った。

時刻は夜。

ヴィヴィオ達は練習を終え、公民館から出た。

「今日も楽しかったねー」

「てゆーか、びっくりの連続だよー」

楽しげに話すヴィヴィオとリオ。

と、ノーヴェがウェンディに頼む。

「悪ィ、チビ達送ってってやってくれるか？」

「あ、了解っス、なんかご用事？」

「いや、救助隊、装備調整だって、じゃ、またな」

「「「「「おつかれさまでしたー！」」」」」

ノーヴェと別れる五人。

そこに、煉にメールが来た。

メールを見た煉は青ざめて

「俺、ジョギングしてから帰る」

それだけ言って猛スピードで何処かに消えた。

「あっ、これノーヴェ姉の携帯、俺、届けて来る」

リュウトはノーヴェを追いかけて行った

「ただいまー」

ヴィヴィオは帰宅した。
「おかえりーヴィヴィオ」
なのはが迎える。
「ママ、これからお風呂？」
「うん、いまフェイトママが入ってるから、そのあとにね」
「ほんと！？それじゃあ……」
ヴィヴィオの顔が輝いた。

フェイトはシャワーを浴びながら、通信でシャーリーことシャリオ・フィニーノと、明日の打ち合わせをしていた。
「フェイトさん、今日も会議と臨検お疲れ様でした、明日も早朝からで申し訳ないんですが」
「ん、大丈夫」
「いつもの所までお迎えにあがりますので！」
「うん、お願いねシャーリー」
フェイトは通信を終わる。
「フェイトママ～♪一緒に入っていいー？」

今度はヴィヴィオの声が聞こえてきた。

「いいよー、いらっしゃーい」

フェイトは当然許可する。

「それじゃあ～……」

「「おじゃましまーす」」

ヴィヴィオとなのはが入ってきた。

「な……なのはもッ！？」

真っ赤になって慌てるフェイト。

「ヴィヴィオが一緒がいいって」

「フェイトママ、明日も早いんでしょ？一緒にいられる間は一緒にいようよー」

「…うん、そうだね……ってあれ？　煉は？」

ヴィヴィオの言葉に折れたフェイトは、ヴィヴィオの頭を撫でながらヴィヴィオに尋ねる。

「えっと、ジョギングしてから帰るって言ってたけど…どうしたのフェイトママ？」

「え～、一緒にお風呂に入ろうってメールしたのに！」

「あ～～！」

ヴィヴィオは何で煉が青ざめたのか……わかった気がした。

「フェイトちゃん、久し振りに髪の毛洗ってあげようか？」
なのはの発言に、フェイトは思わず胸を高鳴らせた。
「あー！わたしもー！」
ヴィヴィオも一緒に洗いたがった。

「それで、クリスみんなに大人気、かわいいって！」
「ほんと？」
ヴィヴィオ二人のママと一緒に湯船につかりながら、今日の事を話した。
フェイトはヴィヴィオに顔を近付け、こっそり訊く。
「みんな、クリスの正式名称については何か言ってた？」
「やっぱりねーとか、いい名前だねって」
すると、
「なーに、ふたりでナイショ話！」
なのはが水鉄砲を撃ってきた。
「やーん」

思わず顔をそむけるヴィヴィオとフェイト。

「あ…そういえばノーヴェ達が、今度ママ達にお礼したいって、こないだ本局を案内してもらったお礼だって」

「なんだ、そんなこと」

「気にしないでって言っといて」

それから、なのはは考える。

「でもほんと、ノーヴェ達もまっすぐ育ってくれてるよね」

「うん……ほんと」

フェイトも同意した。

少し前までは、ノーヴェ達とも敵同士だったのだから、それを思うと、今の状況は、まるで奇跡だ。

一方ノーヴェは、一人夜道を歩いている。

その時、

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします。」

突然彼女に声がかかった。

ノーヴェが驚いて振り返ると、すぐ近くの街灯の上に、

「貴方にいくつか伺いたい事と、確かめさせて頂きたい事が。」

イングヴァルトが立っていた……。

第五話　覇王

「質問すんなら、バイザー外して名を名乗れ」
「失礼しました、カイザーアーツ正当、ハイディ・E・S・イングヴァルト、『覇王』名乗らせて頂いています」

ノーヴェに言われた通り、バイザーを外して名乗るイングヴァルト。

「噂の通り魔か」
「否定はしません」

イングヴァルトは街灯から降りる。

「伺いたいのは、あなたの知己である『王』達についてです、聖王オリヴィエのクローンと、冥府の炎王イクスヴェリア、あなたはその両方の所在を知っていると「知らねぇな」……」

ノーヴェはイングヴァルトの言葉を遮った。

「聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と、知り合いになった覚えはねぇ、あたしが知ってんのは、一生懸命生きてるだけの普通の子供達だ」

ウソではない。
ヴィヴィオもイクスも、実際にそうだ。

「…理解できました、その件については、他を当たるとします」

とりあえずこの事を保留にしたイングヴァルトは、もう一つ訊く。

「ではもう一つ確かめたい事は、あなたの拳と私の拳、いったいどちらが強いのかです」

要するに、自分と戦ってほしいという意味である。

「防護服と武装をお願いします」

「いらねぇよ」

「そうですか」

「よく見りゃまだガキじゃねーか、なんでこんな事をしてる？」

「…強さを知りたいんです」

「ハッ！馬鹿馬鹿しい」

次の瞬間、ノーヴェはイングヴァルトに膝蹴りを打ち込んだ。

イングヴァルトは腕を交差させてこれを受け止め、ノーヴェはそこへ右拳のスタンショットを食らわせる。

しかし、イングヴァルトはこれにも耐え抜き、衝撃で下がった。

（ガードの上からとはいえ、不意打ちとスタンショットをマトモに受けきった…）

ノーヴェは内心舌打ちする。

（言うだけの事ぁあるってか）

仕方がないと悟ったノーヴェは、自分のデバイス、ジェットエッジを起動させ、バリアジャケットを身に纏う。

「ありがとうございます」

イングヴァルトは、やっとその気になってくれた、と礼を言った。

「強さを知りたいって正気かよ？」

「正気です、そして、今よりもっと強くなりたい」

「ならこんな事してねーで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ！」

ノーヴェは言う。

単なる喧嘩馬鹿ならここでやめとけ、ジムなり道場なり、いい所紹介してやっからよ、と。

「ご厚意、痛み入ります、ですが、私の確かめたい強さは…生きる意味は…」

だがイングヴァルトは聞かず、

「表舞台にはないんです」

構えを取った。

（この距離で？空戦（エリアル）？射砲撃（ミドルレンジ）？）

あれやこれやと思索するノーヴェ。

その間に、

イングヴァルトが目と鼻の先に来ていた。

「って！！」
（突撃（チャージ）！！）

ノーヴェは慌てて回避するが、イングヴァルトの動きに翻弄される。

（速い！？違う、歩法（ステップ）！）

そして、ついにイングヴァルトの拳を食らってしまった。

「が……ッ！！」

倒れそうになるノーヴェだが、どうにか距離を取る。
直撃を受けたみぞおちを押さえるノーヴェへ、イングヴァルトは告げた。

「列強の王達全てを倒し、ベルカの天地に覇を成すこと、それが私の成すべき事です」
「寝惚けた事抜かしてんじゃねぇよッ！」

ダメージに耐えながら、イングヴァルトと打ち合うノーヴェ。

「昔の王様なんざみんな死んでる！生き残りや末裔達だって、みんな普通に生きてんだ！！」

二人は互いに距離を取った。

「弱い王なら、この手でただ屠るまで」

冷酷なイングヴァルトの言葉。

それを聞いてノーヴェの頭に浮かんだのは、ヴィヴィオとイクスの姿だった。

「このバカったれが！！」

怒りのノーヴェは光の道を生み出す魔法、エアライナーを発動し、

「ベルカの戦乱も聖王戦争もッ！」

イングヴァルトを撹乱。

「ベルカって国そのものも！！」

さらにイングヴァルトをバインド魔法で拘束。

「もうとっくに終わってんだよッ！！」

そのままエアライナーを使ってイングヴァルトに接近したノーヴェは、ローラー型のデバイス、ジェットエッジに魔力を乗せ、

「リボルバー・スパイク！！」

蹴りを叩き込んだ。

しかし、

「終わってないんです」

ノーヴェの蹴りは受け止められ、さらにバインドまでかけられている。

気付くと、ノーヴェ本人にもバインドがかけられていた。

（カウンターバインド！？どうかしてる…防御捨ててこのバインドを……ッ）

イングヴァルトはバインドを砕く。

「私にとっては、まだ何も」

そして、

「覇王…」

必殺の一撃を、

「断空拳！！」

打ち下ろした。

倒れるノーヴェ。

「弱さは罪です、弱い拳では……」

イングヴァルトはノーヴェに背を向ける。

「誰の事も守れないから」

第六話　覇王ＶＳ煉（前書き）

今回は煉がダンテみたいになります。
でも良く考えると煉がフェイトさんと瓜二つって事はフェイトさんがダンテ口調で喋るんだよね……似合わな！？

第六話　覇王ＶＳ煉

夜の街の月明かりの下。
覇王は、ノーヴェに拳を叩き込んで倒した。

「…次」

覇王はノーヴェをそのままにして、立ち去ろうとする。

「待ちな……覇王（クラウス）」

突然かかった声。
イングヴァルトが振り向くと、そこには右に金色、左に銀色の虹彩異色をもつ、長髪の中性的男性がいた。
男性は続ける。

「覇王（クラウス）を名乗ってる割りに、やってることはチンピラ狩りか？　困ったお嬢（レディ）ちゃんだ」
「…何ですかあなたは？」

いきなり現れて失礼な挑発をする男性に対する嫌悪感を抑えながら、イングヴァルトは尋ねた。

「ヘイヘイ、表情が険しいぜ？　美人になのに、そんなキツイ目つきじゃ男が逃げちまう、笑顔（スマイル）と泣き落（クライ）としは美人の最高の武器だぜ」
「言いたい事はそれだけですか？」
「オイオイ、そう急かすなって、この辺りに覇王を名乗る強いやつがいるって聞いたから、本物か確かめに来たのさ」
「そうですか、ならばお尋ねします、あなたは強いのですか？」

「さあな？試してみるか？」
「…そうさせてもらいます」

イングヴァルトは構えを取った。
男性は、デバイスの名を叫ぶ。

「起きな、夜魔刀」
「ぬかるなよ、バージル」
「オイオイ誰にものを言ってんだよ？　俺が青二才（リトルガール）に遅れを取るもんかよ」

バージルの下にベルカ式の魔方陣が現れセットアップされる。

「…武器ですか」

バージルの刀が、イングヴァルトの目に止まる。

「オイオイ、お嬢ちゃんにこんなもの使う訳ないぜ？」

バージルは刀を背中に差して構えを取る。

「来いよ、覇王（クラウス）！」
「…そうですね、では、始めましょう」

二人の戦いは始まった。

先に動いたのはイングヴァルト。
ステップを利用して離れた距離から一瞬で接近し、左右の拳で連撃

を繰り出す。
バージルは一撃目をかわして二撃目を否して、蹴りを打ち込む。
「！？」
イングヴァルトはうまく防いだが、その一撃の威力に驚いて距離を取った。
相手は見た感じただ拳を、自分に打ち込んだだけ。
だが、威力があまりにも大きすぎる。
（あのタイミングであそこまで威力を上げられるほど、魔力を込める時間はなかったはず…）
どんな魔導師でも、あれだけ短い時間に威力強化として込められる魔力は、ごく少量でしかない。
（まさか！？）
イングヴァルトにとって考えられる事は、一つしかなかった。
「もしやあなたは、【断空】を！？」
「へぇ、断空を知ってるのか？」
言ってイングヴァルトとの距離を詰めて、バージルは拳を浴びせる。
イングヴァルトはそれに耐えながら、再び距離を取る。
（拳、一発一発に断空？……まさかこれ程とは…長期戦になれば、確実に負ける…！！）
自分が勝つには、短期決戦で決めるしかない。

そう思い至ったイングヴァルトは、一か八か、起死回生の一撃を実行すべく、バージルに接近した。

「さあ、派手にイこうぜ！！」

『ほう、小娘がバージルに着いて来るか」

夜魔刀はバージルに付いてくるイングヴァルトを見て驚嘆する。

バージルは速度上げて拳と蹴りの応酬でイングヴァルトに打ち込んで行く。

バージルの攻撃は直撃こそしていないが、相当な威力があるらしく、かすっただけでイングヴァルトの騎士甲冑を削ぎ落としていく。

（力も速さも私より上…しかもまだ本気じゃ無い…私が遊ばれてる…）

バージルの実力に戦慄するイングヴァルト。

（でも技なら…！！）

イングヴァルトはバージルが見せた一瞬の隙を突き、バージルの懐に潜り込んだ。

「覇王…」

そのまま足先から力を練り上げ、

「断空拳！！」

バージルの鳩尾に拳を、練り上げた力を打ち込む。

「オイオイ、こんなもんか？」
「そんな！？」

バージルは左手でいとも簡単に断空拳を止める。

「ヘイ、本物はこうやるんだぜ？　覇王断空拳？」

イングヴァルトはバージルの断空拳を避けられず、直撃を受けて背後の壁に叩きつけられた。

「がっ！！」
（今の技は！？）

突然の事に混乱するイングヴァルト。
何が起きたのか。
自分と同じ断空拳を使われた？
あり得ない事が多過ぎてイングヴァルトは混乱した。

「ヘイヘイ、弱すぎだぜ？」
「くっ…」

イングヴァルトはよろめきながら立ち上がる。
その時、

「そこまでにしろ！」

今度は青い瞳でポニーテールの男性が現れる。

「んだよ、邪魔するなよ、お前（ボーイ）、覇王（ガール）が逃げちまったぜ」
「それでいいんだよ、煉、後は任せてくれないか？」

「好きにしろよ、次に何かあったら地獄(ヘル)行きにしてやるぜ」
「面倒をかける、煉」
「はっ！　気にすんなよ、リュウト」

第七話　アインハルト・ストラトス

煉との戦いから撤退したイングヴァルトは、コインロッカーの前に来ていた。

（…彼女の一撃も…あの人の一撃も…凄い打撃だった…危なかった…）

ノーヴェの実力は凄まじいものがある。
加えて、その後に煉から受けたダメージも……。
意識を保てたのは、奇跡に近い。

（この体は…間違いなく強いのに…）
「武装形態……解除……」

イングヴァルトはふらつきながらも、騎士甲冑を解除する。

（私の心が弱いから…）

光に包まれるイングヴァルト。
やがて姿を現したのは、小さな少女だった。

（帰って少しだけ休もう、目が覚めたらまた……）

少女はコインロッカーの鍵を出す。

と、ここで受け続けたダメージが限界を迎える。
少女は倒れた。

（だめ…こんな所で倒れたら……）
立ち上がろうとする少女。
しかし、抵抗虚しく、少女は意識を手放した。

リュウトは煉と別れた後、道の真ん中で仰向けに倒れているノーヴェに声をかける。
「ノーヴェ姉、生きてるか！？」
ノーヴェに駆け寄るリュウト。
「リュウトか？　ちょっと手ぇ貸してくれ」
「ああ」
リュウトはノーヴェに手を貸し、起き上がらせた。
「本気で助かった、でも、何でお前がいるんだ？」
「ノーヴェ姉が携帯を忘れたから届けに来たんだ」
そう言ってリュウトは携帯を渡す。
ノーヴェはコンソールを出し、ナカジマ家に連絡を入れる。
モニターが現れ、スバルの姿が映された。
「はいスバルです、ノーヴェどうかした？」
「ああ、悪ィスバル、ちょっと頼まれてくれ、喧嘩で負けて動けね

ー」
「ええッ！？」
驚くスバル。
ノーヴェは構わず続ける。
「相手は例の襲撃犯、きっちりダメージブチ込んだし、蹴りついでにセンサーもくっつけた、今ならすぐに捕捉できる」
「わ、わかった！とにかく今から行くね！」
ノーヴェとスバルは通信を切った。

朝。
少女は目覚めた。
しかもなぜかベッドの中にいる。
「！？」
飛び起きる少女。
その隣には、
「よう、やっと起きたか」
ノーヴェが横になっていた。
「……あの、ここは……？」

少女は状況が理解できず、ノーヴェに訊いてみる。
と、部屋のドアがノックされた。

「はい」

ノーヴェが返事をすると、一人の女性が入ってくる。
彼女の名はティアナ・ランスター。
スバルの同僚だ。
スバルの家には時々遊びに来る。

「おはようノーヴェ、それから……」

ティアナはノーヴェに朝の挨拶をしてから、少女に目を移した。
ノーヴェは少女の名を言う。

「自称覇王イングヴァルト、本名アインハルト・ストラトス、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院中等科一年生」
「ごめんね、コインロッカーの荷物出させてもらったの、ちゃんと全部持ってきてあるから」

ティアナは謝罪の意を述べた。アインハルトと呼ばれた少女がすぐ側にある机の上を見ると、確かに持ってきてある。

「制服と学生証持ち歩いてっとは、ずいぶんとぼけた喧嘩屋だな」

ノーヴェに言われ、アインハルトは目をそらす。

「学校帰りだったんです、それに、あんな所で倒れるなんて…」

そこへ、

「あーみんなおはよー」
料理を乗せたお盆を持つスバルがやって来た。
「おまたせ♪あさごはんでーす」
「おお、ベーコンエッグ！」
「あと、野菜スープね」
ノーヴェは喜ぶ。
アインハルトはそれをあっけに取られて見ていたが、スバルはアインハルトの存在に気付く。
「あ…はじめましてだねアインハルト。スバル・ナカジマです。事情とか色々あると思うんだけど、まずは朝ごはんでも食べながら、お話聞かせてくれたら嬉しいな」

というわけで、一同は朝食を摂ることに。
「んじゃ、一応説明しとくぞ」
ノーヴェは紹介する。
「ここはこいつ……あたしの姉貴、スバルの家」
「うん」

スバルは軽く返事をし、
「で、その姉貴の親友で、本局執務官」
「ティアナ・ランスターです。」
ティアナは名乗った。
「お前を捜して保護してくれたのはこの二人と……此奴、感謝しろよ」
「うま～い、スバル姉、料理の腕を上げたね」
ノーヴェは野菜スープに夢中のリュウトを指差して言う。
「でもダメだよノーヴェ、いくら同意の上の喧嘩だからって、こんなちっちゃい子にひどい事しちゃ」
「こっちだって思いっきりやられて、まだ全身痛ェんだぞ」
「てか、止めを刺したのは煉だけどな」
「煉？」
スバルは聞き慣れないなまえに首を傾げる。
「あ、あの、えっと」
「ああ、俺はリュウト・ナカジマ、宜しく、先輩」
「あっ、はい、宜しくお願いします、リュウトさん」
「ね～、リュウ、煉って誰？」
「最近転入して来た奴で本名は高町　煉　なのはさんの甥っ子だとさ」
「ふぇ～」
「高町　煉さん」
「先輩……手出しは駄目だからな」

リュウトがアインハルトに釘を刺す。
そして、ティアナはアインハルトに尋ねる。
「格闘家相手の連続襲撃犯があなたって言うのは……本当？」
「…はい」
「理由聞いてもいい？」
しかし、ティアナの質問には、ノーヴェが答えた。
「大昔のベルカの戦争が、こいつの中ではまだ終わってないんだとよ、んで自分の強さを知りたくて、あとはなんだ…聖王と冥王をブッ飛ばしたいんだったか？」
「最後のは……少し違います、古きベルカのどの王よりも、この覇王の身が強くあること、それを証明できればいいだけで…」
それを聞いたティアナは、さらに尋ねる。
「聖王家や冥王家に恨みがあるわけではない？」
「はい」
「そう、なら良かった」
スバルは安堵の表情を見せ、アインハルトはそれを見た。
ティアナが言う。
「スバルはね、そのふたりと仲良しだから」
「そうなの」
スバルは優しく笑った。
アインハルトは、スバルをじっと見ている。

「ああ、冷めちゃうからよかったら食べて」
「……はい……」
アインハルトはスバルに言われて、手を進めた。
ティアナはアインハルトに言う。
「あとで近くの署に一緒に行きましょ、被害届は出てないって話だし、もう路上で喧嘩とかしないって約束してくれたら、すぐに帰れるはずだから」
「あの…ティアナ」
そこで、ノーヴェが割り込んだ。
「今回の事については、先に手ェ出したの、あたしなんだ」
「あら」
「だから、あたしも一緒に行く、喧嘩両成敗ってやつにしてもらおう」
それからアインハルトに訊く。
「お前もそれでいいな？」
「はい……ありがとうございます」
湾岸第六警防署。

ノーヴェ、アインハルトとともにここを訪れたリュウト、スバル、ティアナ。
スバルはティアナに謝る。

「ごめんねティア、折角の非番なのに」
「それはあんたも一緒でしょ、しかしあんたってば、ベルカの王様とよく知り合うわよねぇ」
「ねー」

ヴィヴィオにイクスにアインハルト。
スバルは三人もの王と対面したのだ。

「でもあの子…アインハルトも色々抱え込んじゃってるみたいだし、このまま放ってはおけないかも」
「そうね、でもその前に、あんたの可愛い妹がひと肌脱いでくれそうじゃない？」

ティアナは手続きをしているノーヴェとアインハルトを見ながら言った。

手続きを終え、結果を待つアインハルトは、一人思っていた。

（私は何をやってるんだろう…やらなきゃならない事、沢山あるのに…あの人にも…もう一度会いたいのに……）

あの人、金と銀の虹彩異色の男、煉である。

彼女は煉が何故、覇王流を使えるのかが知りたかった。
と、

「よう」

ノーヴェが缶ジュースをアインハルトの頬に当てる。

「ひゃっ！！」

アインハルトは驚いた。

「スキだらけだぜ、覇王様」

してやったりという顔のノーヴェ。
アインハルトは顔を赤くしながら、あわあわするしかなかった。
それを見ていたリュウトは

（可愛いな……いかんいかん…俺にはヴィヴィオが）

などと悩んでいた。

ノーヴェはアインハルトにもジュースを渡し、自分のジュースを飲みながら訊く。

「もうすぐ解放だと思うけど、学校はどーする、今日は休むか？」
「行けるのなら行きます」
「真面目で結構、で…あのよ、うちの姉貴やティアナは、局員の中

でも結構凄い連中なんだ、古代ベルカ系に詳しい専門家も沢山知ってる、お前の言う『戦争』がなんなのかはわかんねーけど、協力できる事があんならあたしたちが手伝っってやる、だから……」
「聖王達には手を出すな……ですか？」
「違ェよ、あ、違わなくはねーけど」
ノーヴェはうまく説明できなくて、頭をかいた。
「ガチで立ち合ったからなんとなくわかるんだ、おまえさ…」
ようやくそれっぽい言葉を見つけたノーヴェは言った。
「ストライクアーツが好きだろう？」
アインハルトはノーヴェを見つめる。
「あたしもまだ修行中だけど、コーチの真似事もしてっからよ、才能や気持ちを見る目だけはあるつもりなんだ。」
「…」
「……違うか？好きじゃねーか？」
「…好きとか嫌いとか、そういう気持ちで考えた事がありません、覇王流（カイザーアーツ）は、私の存在理由の全てですから…」
どこか悲しそうな顔をするアインハルト。
ノーヴェは尋ねた。
「聞かせてくんねーかな？覇王流のこと……おまえの国の事……おまえがこだわってる戦争の事……」
「……私は……」

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院初等科校舎図書室。

「あったあった！これがオススメ！」

コロナは本を持ってきた。

「『覇王イングヴァルト伝』と『雄王列記』、あとは当初の歴史書！」

「ありがとコロナ」

ヴィヴィオはお礼を言って本を受け取る。

「前にルーちゃんにおすすめしてもらったんだ」

と、リオと煉が訊いた。

「でもどーしたの？急にシュトゥラの昔話なんて」

「歴史の勉強でもするのか？」

「うん、ノーヴェからのメールでね、この辺の歴史について一緒に勉強したいって」

「なるほど、俺も手伝うよ、何か資料を集めてみるぜ」

「ありがとうね煉くん、あ、それから今日の放課後ね！ノーヴェが新しく格闘技やってる子と知り合ったから、一緒に練習してみないかって」

煉はヴィヴィオを手伝いながら思った。

（シュトゥラか、奴は捕まったのか？）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7944x/

魔法少女リリカルなのはvivid 高町家の男子

2011年10月22日06時17分発行